

[特集I]

戦後80年 戦争の記憶I 横浜中央電話局員の空襲体験



ご自由にお持ちください



[特集II]

戦後80年 戦争の記憶II 陸軍溝ノ口演習場と地域社会

— 工藤義直さんに聞く —

[展示余話]

運河が語る横浜の戦後

企画展「運河で生きる ～都市を支えた横浜の“河川運河”～」

横浜都市発展記念館

ハマ発 NEWSLETTER 第42号 2025(令和7)年7月19日発行(年2回発行・不定期)
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 〒221-0021 横浜市中区日本大通12 TEL.045(663)2424 FAX.045(663)2453
題字ロゴ/高橋健介 本誌からの無断転載を禁止します。

EXHIBITION

特別展のご案内



聖母愛児園分園ファチマの聖母少年の町子どもたち
昭和30年代 当館所蔵
ファチマの聖母少年の町卒園生寄贈

【会期】2025(令和7)年7月19日(土)～9月28日(日)

特別展関連事業

I. 展示解説

調査研究員が特別展の見どころを解説します。
日 時 8/3(日)、11(月・祝)、15(金)、31(日)
9/14(日)、23(火・祝)、27(土)、28(日)
※いずれも 14:00 から 40 分程度
会 場 横浜都市発展記念館 企画展示室
参加費 無料 (特別展観覧券が必要です)
定 員 各回20名程度
事前申込不要 当日直接会場にお越しください。

II. 関連記念講演会

「当事者が語る『GIベビー』の記憶」

横浜で「GIベビー」として育った青木ロバート氏を
招き、対談形式でお話を伺います。
日 時 2025.9/15(月・祝)
14:00～15:30(受付は13:30～)
会 場 横浜情報文化センター 6階 情文ホール
定 員 先着200名 参加費 1,000円
申込方法 当館HPをご覧ください。
※有料のアーカイブ配信も行います。
(購入方法など詳細は追って当館HPでお知らせします)

III. 関連展示

「動画公開 当事者が語る戦争被害」

期 間 2025.7/19(土)～9/28(日)
会 場 横浜都市発展記念館1Fギャラリー
観覧無料

ホームページはこちら

※展示の最新情報・申込方法をご確認ください

<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>



MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップより

刊行物

- 『運河で生きる ～都市を支えた横浜の“河川運河”～』^①
横浜都市発展記念館/編 定価2,000円
- 『関東大震災100年 関東大震災と横浜 廃墟から復興まで』^②
横浜都市発展記念館・横浜開港資料館/編 定価2,200円
- 『横浜鉄道クロニクル 発祥の地の150年』^③
横浜都市発展記念館/編 定価1,540円



横浜都市発展記念館 利用案内

■開館時間

午前9時30分～午後5時(券売は閉館30分前まで)

■休館日

毎週月曜日・年末年始ほか
(月曜日が祝日の場合は開館、翌平日に休館します。)

■観覧料

上記特別展開催期間
一般800円/小・中学生、および市内在住65歳以上の方400円
※毎週土曜日は大学生以下無料
※「障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」などをお持ちの方は、無料です。
※毎週第2水曜日「濱ともデー」は市内在住65歳以上無料
それ以外の期間 常設展のみ
一般200円/小・中学生、および市内在住65歳以上の方100円

■ホームページ

<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>

※本誌は当館ホームページでもご覧いただけます。



●表紙図版
戦時中の横浜中央電話局職員
1943年(昭和18)頃 川島善子氏所蔵



交通アクセス

- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
- 横浜市営地下鉄ブルーライン関内駅(1番出口)から徒歩約10分
- J R 京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
- 横浜市営バス・神奈中バス「日本大通り駅東口」下車徒歩1分



編集後記

本号では、「特集 戦後80年 戦争の記憶」として、横浜の戦争と戦後に関わる当館の研究成果を掲載しました。ここにおける「戦争の記憶」とは何でしょうか。それは、西村・吉田両論考が示しているように、一つには戦時下を生き延びた一人一人が伝える記憶のことを指し、二つには地域に残る記憶(地形・モニュメント等)のことを指します。こうした「戦争の記憶」をどのように記録し、次代に継承していくことができるでしょうか。(松)



戦後80年 戦争の記憶Ⅰ

横浜中央電話局員の空襲体験

本年は戦後80年の節目の年である。当館では開館以来戦中・戦後期の資料を積極的に収集し、調査研究を進めており、諸種の成果を蓄積してきた。本年開催する特別展「戦後80年 戦争の記憶―戦中・戦後を生きた横浜の人びと―」では、初公開資料を含む多くの資料を展示する。

本稿で紹介する戦時期に横浜中央電話局員であった方々の資料は、本展で初公開する資料の中でも、特に当館にとって重要な資料である。現在、当館と横浜ユーラシア文化館が入る建物は、通信省によって1929年（昭和4）に横浜中央電話局（以下、局）の局舎として建てられたもので、多くの女性電話交換手が勤務していた。1945年（昭和20）5月29日の横浜大空襲時にも、多くの職員が局内で勤務していたが、空襲時の状況については、本誌第23号において、鶴見すみ子氏の聞き書きが掲載されているものの、詳細が不明な点が多かった。今回の展示調査のなかで、当時の局員が残した日記が発見されたほか、新たな証言者から詳細な聞き取り調査を行うことが出来

① 平井富貴子氏（後列左端）と同僚の局員 1943年（昭和18） 福岡義晴氏所蔵



ため、本稿で紹介したい。

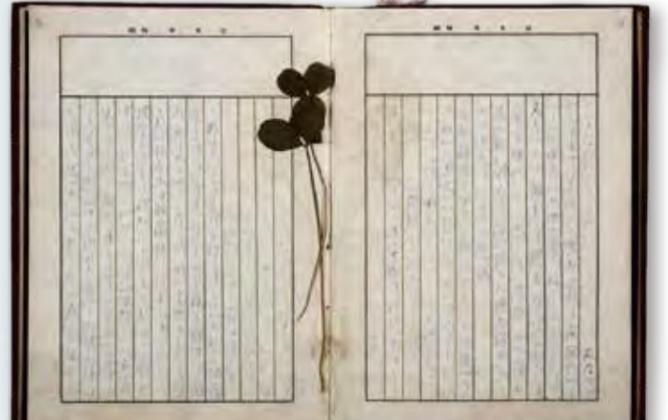
平井富貴子氏の空襲体験記録

1924年（大正13）生まれの平井富貴子氏（1924〜2005）^①は、南区の太田尋常高等小学校（現市立太田小学校）を卒業後、1939年（昭和14）に横浜中央電話局に就職し、局内で空襲に遭った。平井氏はこの時期に日記を毎日記しており、1945年の日記が現存する。

日記によれば、平井氏は夜勤明けであったが、配給などの用事があり、定時より遅く帰宅する所であった。しかし、空襲が始まったため、上司の指示で局の地下室に避難する。この後、上司より山下公園に避難するように指示を受け、外に出るが、すでに周りが火に包まれていたため、身の危険を感じ、近くの防空壕に避難する。そこも危険と感じ、仲間と共に山下公園の防空壕に入る。壕内には捕虜が数名、私服の憲兵と共に避難していた。平井氏はこの時の心境として「ノンキな故か少しも恐い等とは感じない、死なば諸共ですもの」と記している。空襲が終わったのち、「ここへ避難した記念」として共に避難した仲間と公園内のクローバーを摘んだことも記されており、激しい空襲にも動じない平井氏の心境がうかがえる。日記には、2本の押し草が挟まれているが、これが日記の記述にあるクローバーであると考えられる^②。

この後、局舎が無事であったことを確認したのちに平井氏は帰途に付くが、中区初音町付近で見た遺体について「フト見ると仰向けに倒れた真黒な焼死体、一寸人間とは思へぬ、泥人形と云った感。交差点だけで三四人居る、別に気味悪くも何ともない、只本当にお気の毒だと思ふ」という感想が記されており、続けて家族の身を案じる心境を記している。幸い平井氏の家族は無事であったが、家は焼失していた。しかし、日記は平井氏の母が持ち出して焼失を免れたため、平井氏は引き続き日記を書き続け、空襲で亡くなった仲間に対する心境などを記している。平井氏の日記は、記憶が鮮明に残る空襲直後に自身の空襲体験を記した貴重な記録といえる。

② クローバーが挟まれた平井氏の日記 1945年（昭和20） 福岡義晴氏所蔵



川島善子氏の証言記録

1928年（昭和3）生まれの川島（旧姓：服部）善子氏^③は、南区の井土ヶ谷尋常高等小学校（現市立井土ヶ谷小学校）を卒業後、1942年（昭和17）に局に就職する。川島氏は当時、昼夜交代勤務制であった交換手の業務をよく記憶されている。

川島氏は横浜大空襲の当日、空襲が始まると、局員と共に地下室に避難するが、外から煙が流れ込んできたため、山下公園に避難するよう指示を受け、公園内の壕に避難した。壕内には10人前後が避難しており、憲兵もいたという。しかし、上司より局に戻って仕事を続けるように指示され、空襲のさなかに壕を出て局に戻り、「予約台」と呼ばれる交換台で勤務を続けた。空襲時、夜勤明けで帰宅した局員と空襲で出勤できなかった局員がいたため、ベテランの技術を要する「予約台」を担当できる局員が足りず、川島氏呼び戻されることになったという。

辛い局は煙の流入以上の空襲被害を受けることはなかったが、空襲時においても業務を完遂するこのエピソードは、戦



③ 川島善子氏近影、2025年2月撮影 川島氏が手に持たれているのは、電話事務員見習養成課程の修了証書、当館に寄贈されることになった。



④ 空襲の犠牲となった伏見しづゑ氏 川島善子氏所蔵



⑤ 伏見しづゑ氏から贈られたメモ帳 川島善子氏所蔵



①新石川在住の工藤義直氏
2025(令和7)年4月撮影

陸軍溝ノ口演習場 と地域社会

— 工藤義直さんに聞く —

一、軍事施設の痕跡

横浜市の北端部、川崎市宮前区と隣接する青葉区新石川には、東急田園都市線のたまプラーザ駅を中心に、閑静な住宅街が広がっている。そのなかにある國學院大學横浜たまプラーザキャンパスのグラウンドは、東、北、西の三方を高台が囲む特徴的な地形をしており、周囲と比べて低い位置にある。また、航空写真を確認すると、野球場とトラックを合わせた全体は奥行きのある長方形となっている。この地形は人工的につくられたもので、その歴史は今からおよそ80年前の第二次世界大戦の時期までさかのぼる。

地元の郷土史家である横溝潔氏の著した「山内のあゆみ―石川編」(音羽書房、1996年)によれば、1941(昭和16)年、陸軍は現在のグラウンドにあたる土地の買取を行った後、翌42年1月から射撃場の工事を実施し、1943年春から訓練に使用したという。つまり、グラ



②横浜市三千分一地形図「元石川」
1954(昭和29)年12月測図(空中写真測量)
横浜市史資料室所蔵



③國學院大學
横浜たまプラーザキャンパスのグラウンド
2025(令和7)年4月撮影

二、作業員寄宿舎

1940(昭和15)年12月30日、陸軍演習場規則の付表に「溝ノ口演習場」の名前が初めて記載される。「神奈川県橘樹郡」を所在地としたこの演習場は、東京市麹町区代官町に司令部を置く近衛師団が管理し、東京に所在する各部隊の演習に使用されることになった。同年7月10日制定の「軍編合並配置表」(軍令陸乙第19号)によれば、陸軍省は歩兵第101連隊(東部第62部隊)の衛戍地(駐屯地)を「溝ノ口」に指定している(防衛庁防衛研究所戦史部編『戦史叢書 陸軍軍戦備』朝雲新聞社、1979年)。9月1日、馬絹・土橋・梶ヶ谷・上作延・下作延の住民たちは宮崎尋常小学校に集められ、陸軍から土地の買取と1年以内の移転を迫られたという(川崎市編『川崎市史通史編 四上』川崎市、1997年)。衛戍地に決まったことで、軍事施設の造営が急速に進み、1942年11月20日には東京から部隊も移転してくる。そしてこの波は隣接する横浜地域にも押し寄せてきた。

工藤義直氏の回想によれば、国民学校入学の年、すなわち1941年に射撃場用地の買取があったという。横浜市港北区北綱島町の名望家である飯田助夫は同年7月1日の日記(飯田助知氏所蔵)に、「本日山内村石川地内百五十三町歩陸軍買取の旨、此方面は旧橘樹郡宮前、向丘四百町歩買取と併行して近衛三聯隊移転先となるものらしく、価格は公定の

最高なりと云ふも坪六十銭反歩百八十円が山林の値にして現在五百円位のものなり。来年三月迄に整地の十七年度事業着手」と記している。工藤氏の記憶に間違いはないだろう。射撃場の造営工事は1942年から2年ほどかかったという。

工事が始まると、高津谷戸の周辺には100人以上入る大きな従業員寄宿舎(飯場)がつくられ、憲兵の屯所も設けられた。寄宿舎は現在の①新石川4丁目(桜並木通り付近)、②新石川3丁目(新石川小学校付近)、③新石川2丁目(三ヶ所)にあった。工事に従事する労働者の中には、朝鮮半島の出身者も多くおり、家族で生活していた。軍事警察である憲兵はその監視にあたったと考えられる。当時、横浜市及び川崎市は横浜市中区宮川町に所在する横濱憲兵分隊の管轄区域であり、1939年12月1日には、川崎市の宮前町(現・川崎区)に川崎憲兵分遣隊も開設されていた(官報)1939年12月20日)。高津谷戸にはそこから憲兵が派遣されたのかもしれない。山内国民学校には、親と一緒にやって来た朝鮮半島出身の児童も4、5人くらい通学しており、工藤氏の同級生にもいたという。話す言葉が違ったので、よく覚えていないそうである。

横溝潔氏の研究によれば、射撃場の工事は白井組や大久保組が担った。工事が始まると、かつての遊び場だった田圃は軍用地となり、通学路も変更された。現

場の作業員たちはトロッコやスコップを用いて工事を行い、憲兵の監視下、午後四時頃には寄宿舎に帰っていった。そうすると、工藤氏は友人たちとトロッコを使って遊んだという。現在、新石川小学校のある丘は高かったが、射撃場の造営にあたり、土地を削って低くし、標的などを配置していった。射撃場の設置によって地形は大きく変化したのである。

三、射撃場の運用

陸軍演習場規則によれば、演習場の管理は担当師団の管理委員会が行うことになっており、溝ノ口演習場の場合は、担当の役員が1人置かれていた。この役員が何者か不明だが、工藤義直氏の記憶によれば、射撃演習の時は、演習場付近に住む「番宅」へ前日に陸軍から電話連絡があり、それを受けた管理人は演習を知らせる赤い旗を丘の上、現在の新石川小学校の位置にあった掲揚台に掲げた。また、地域の代表者にもそのことを伝え、代表者は謄写版を用いて各戸に情報を伝達した。管理人は戦争で親を亡くした女性だったという。射撃訓練が始まると、周辺の道路は通行不能となり、周囲まで発砲音が響いたそうである。銃座から標的までの距離はおよそ400メートルで、重機関銃の訓練も可能であった。

高津谷戸の射撃場は条件の良い訓練施設だったようで、溝ノ口衛戍地に駐屯する陸軍部隊だけでなく、東京衛戍地に駐屯する陸軍部隊、さらに相模原方面に所在する陸軍士官学校なども利用した。現

ンドの特徴的な地形は陸軍の射撃場由来している。この射撃場は現在の川崎市宮前区・高津区から横浜市青葉区まで広がっていた広大な溝ノ口演習場の一部で、川崎市青少年の家(宮前区宮崎)や川崎市立宮崎中学校(同)、虎の門病院分院(高津区梶ヶ谷)付近に駐屯した陸軍部隊(東部第62部隊など)が主に使用していた。ただし、防衛省防衛研究所所蔵の公文書等に造営に関する記録はなく、また、地域側の記録も乏しいため、その詳細は同時代を生きた人びとの記憶に頼るところが大きい。

今回、横溝氏から青葉区新石川、かつて高津谷戸と呼ばれた地域にお住いの工藤義直氏をご紹介いただき、溝ノ口演習場に関するお話をうかがった。1934(昭和9)年6月、神奈川県都筑郡山内村(1939年4月1日以降は横浜市港北区、現・青葉区)に生れた工藤氏は現在91歳、第二次世界大戦中は7、11歳で、荏田にあった山内国民学校第二分校に通っていた。高台に位置した自宅(現在の高津公園周辺)は日々農家で、夜は遠方に町田方面や登戸方面の光が見えたという。山内村は谷戸の間に水田が広がる農村地帯で、幼少の頃、工藤氏は水田でカエルやヘビを捕まえて遊んでいた。本稿では、工藤氏の記憶を中心に、溝ノ口演習場の歴史を追いかけていきたい。なお、聞き取り調査は、2025(令和7)年4月4日に工藤氏の自宅にて筆者が行った。

在の山内中学校(青葉区美しが丘5丁目)には、溝ノ口演習場の廠舎があり、訓練にやって来た兵士たちの宿泊に用いられていた。また、大山街道(現在の国道246号線)は軍隊の往来が激しく、兵士をたくさん乗せた軍用車両や野戦重砲を引く軍馬なども通っていた。そして射撃場周辺にも多くの軍馬がやって来る。そのため現在の國學院大學の野球場、バックネット裏付近には糧秣倉庫が設けられ、軍馬用の秣を保管していた。地域の農民たちは夏に刈った草を乾燥させ、陸軍の倉庫に納品したという。

演習地となったことで、地域の中に常に軍隊が存在するようになった。食糧不足だったこともあり、訓練中の兵士たちは休憩時間になると付近の農家に上がり、米や味噌を奪っていったという。また、跳弾等による被害もあったようで、射線上に位置した犬蔵(現・川崎市宮前区)では、家屋に着弾した事例もあった。一方、訓練が終了し、赤い旗も降ろされると、射撃場へ進入することも可能であった。工藤氏ら子どもたちは標的裏から弾丸を回収し、火で鉛を溶かして遊んだそうである。こうした軍隊と地域との関係は、1945年8月15日の敗戦によって終わりを迎えることになった。

(吉田 律人)

※調査にあたっては工藤義直氏、横溝潔氏、相澤雅夫氏、飯田助知氏に大変お世話になりました。ここに記して謝意を表します。

余話 展示

運河が語る横浜の戦後 企画展「運河で生きる」都市を支えた横浜の「河川運河」

企画展「運河で生きる」都市を支えた横浜の「河川運河」では、横浜に河川運河が形成される明治期から、河川運河が都市計画事業によって開発されていく1970年代後半までを中心に、河川運河の景観の変化と、そこで生きる人びとの歴史を紐解いた。このうち、戦後の運河について取り上げた章では、写真資料を中心に、戦後の横浜の景観の変化を、運河とその周辺の変化に注目して紹介した。本稿では、展示の内容を踏まえつつ、河川運河を撮影した写真から、戦後占領期の横浜の様子を見てみたい。

①は大岡川河口部を大江橋方面に撮影したもので、河川上には船を改装した水上ホテルが浮かぶ。戦後、桜木町駅周辺には公共職業安定所の出張所があり、職を求めて多くの労働者が集まった。彼らは簡易宿泊所や厚生宿舎に宿泊していたが、宿泊できず野宿を強いられるものも多かった。このほか、市内では様々な事情で単身あるいは家族で日雇いの生活をする者も見られ、彼らへの社会福祉が課題となった。こうしたなか、横浜市は1949年、浮浪者問題対策

として水上宿舎、通称「水上ホテル」を開設する。水上ホテルは廃船となった達磨や発動機船に部屋を増設したもので、写真でも4隻の水上ホテルを確認できる。水上ホテルは大岡川の各所で見られる。②は末吉町の旭橋付近を撮影したもので、左側に小此木商店を確認できる。水上ホテルのなかには、船の大きさに釣り合わない増設を行い、川との固定も支柱数本で行うなど、不安定なつくりのものも見られた。これらの水上ホテルは沈没や崩壊する危険性が高く、1951年には死傷者40名を超える転覆事故が発生した。③には、川に張り出したバラックも確認できる。大岡川や、桜木町駅の横を流れる桜川の川沿い(③)には露店やバラックが立ち並び、横浜に流れてきた人びとの生活を支えたが、戦後復興のなかで撤去されていく。桜川は都市計画道路の建設のために1947年から埋め立てが始まり、川沿いの露店業者の多くは当時の中区役所横に建設された「桜木町デパート」に移転した。ところが、このデパートも道路建設のなかで移転を迫られ、最終的に露店業者が移転や撤去によ

り退去し、デパートが取り壊されたのは1972年だった。この際、露店業者の一部が移転したのが、現在、大岡川を象徴する景観の一つとなっている都橋商店街ビルだった。大岡川沿いのバラックや水上ホテルは、住民運動の高まりを受けて撤去に向けた動きが本格化し、水上ホテルは河川法の適用で1959年9月中旬にすべて撤去された。しかし、水上ホテルに宿泊していた人びとの保護は先送りとなり、彼らの受け皿となった寿町の問題へとつながっていく。

戦後の横浜において、水上ホテルや露店、バラックが川沿いに形成されていた背景の一つが、連合国軍による接収だった。戦後、横浜では市街地の中心部の多くが接収され、そこには関内や伊勢佐木町などの主要な繁華街も含まれていた。野毛や大岡川沿いの露店は、こうした状況下で横丁を形成していったのである。接収による景観の変化がわかるのが④である。吉田川に架かる蓬萊橋を女性兵士が渡っており、画面奥には155病院として接収されていた伊勢佐木町の松屋呉服店が見える。戦前の横浜で有数の繁

華街だった伊勢佐木町には、接収中、連合国軍向けの土産物店が並んでいた(⑤)。伊勢佐木町や、蓬萊橋が架かる蓬萊町周辺の関外地区の接収は1950年代後半以降解除されていくが、長期の接収は、戦争で焼失した横浜市街地の復興に影響を及ぼした。⑥は1965年、空襲で焼けた蓬萊町の教会を撮影したもの。蓬萊町の対岸の関内地区は関外地区より一足早く接収の解除が進み、建物の建設が進む一方、関外地区では、50年代になっても更地が多かった。教会からは、更地のままの蓬萊町、吉田川、1959年に派大岡川の対岸に完成した横浜市庁舎が見える。⑥からは、派大岡川を挟んで、戦後復興の様子が異なっていたことがわかる。

河川運河を撮影した写真資料は、横浜にとっての戦後復興が、いくつもの問題との葛藤のなかで進められ、戦後から現代に至っていることを私たちに伝えている。

(松本 和樹)



① 柳橋付近の水上ホテル 1954年5月5日
広瀬始親氏撮影・寄贈 横浜開港資料館蔵



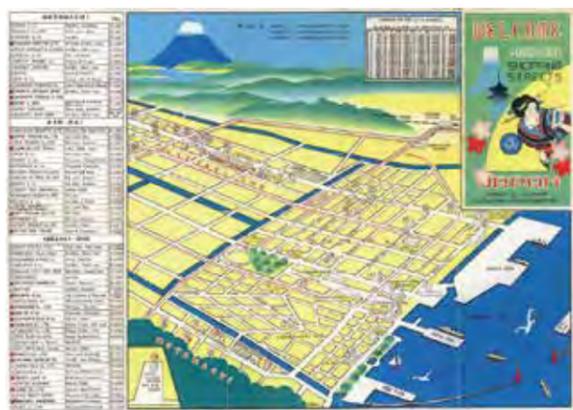
② 末吉町旭橋付近の水上ホテルとバラック 1954年5月15日
広瀬始親氏撮影・寄贈 横浜開港資料館蔵



③ 野毛カストリ横丁 1949年
奥村泰宏氏撮影・栗林阿裕子氏寄贈 当館蔵



④ 蓬萊橋にたたずむ女性兵士 1954年
五十嵐英壽氏撮影・寄贈 当館蔵



⑤ YOKOHAMA SHOPPING STREETS 1956年頃 当館蔵



⑥ 蓬萊町教会の焼け跡 1965年 五十嵐英壽氏撮影・寄贈 当館蔵